

第5回「森の広場」市民観察会

観察ガイドブック



モリアオガエルの産卵行動

- 日 時: 2008年6月15日(日) 10:00~12:00
テーマ: 初夏・野山へようこそ!「モリアオガエルほか」観察会
次 第: 1.受 付 09:30~
2.開会式とオリエンテーション 10:00~
3.野外観察会 10:30~
4.まとめと閉会式 11:30~

主 催: 森の広場市民観察会実行委員会 (青森市内8団体参加構成)
共 催: 新城縁故者委員会 後 援: 青森市、東奥日報社

「森の広場」設置の経緯

太平洋戦争後、合浦公園に建設された市営競輪場の郊外移転に選択されたのが新城財産区所有の森林地帯でした。当時新城財産区から譲り受けた森林約53haの内、競輪場建設に要した22haの残存森林の利用法として考えたのが「スポーツその他の多目的広場」だったようです。名称は「森の広場」とし、管理棟、研修室、トイレなどの他、野球場、ゲートボール場などを林野庁補助事業である「生活環境保全整備事業」で整備したもので、管理運営は青森市生涯学習課スポーツ振興チーム所管の施設となりました。しかし、残念ながら利用者は野球同好者だけで、他に山菜採りの人が訪れる程度だったため、周辺の手入れも疎かにされ、せっかく整備したミズバショウ観察路も崩落したままになっています。地元新城の住民ですら知らない場所で長い間眠った状態の施設でした。

この度の青森市内自然愛好諸団体の合同観察会をきっかけに一般市民への啓蒙を計り、将来的には「青森野草園」をも視野に入れた運動に発展できればと考えております。

遊歩道だけは毎年管理を委託されてきた「新城財産区縁故者委員会」の皆様により刈り払いが行われ、歩きやすく整備されております。四季折々の森林浴や草木の観察ルートとしてご利用下されば今回の合同観察会を企画した関係者一同の喜びでもあります。

市民観察会スタッフ一同 (2006.5)

森の広場市民観察会スタッフ(主催8団体、順不同)

「青森の自然環境を考える会」「ウォッチング青森」「青森・草と木の会」「樹木医会」
「青森野鳥の会」「森林インストラクター会」「青森自然誌懇話会」「やぶなべ会」

■ 生物観察のポイント

- [生育環境] どんな処にいましたか？
- [行動(動物)] どんな行動をしていますか？
- [状態(植物)] どんな状態(芽立ち・花・実など)ですか？
- [生物の種類] 特徴的な形や色を観察しましょう。スケッチなども有用です。
- その他気づいた点などをどんどんメモしましょう。自宅へ帰ってからメモを再確認しながら調べると、とても勉強になります。

モリアオガエルの卵を観察しよう!



モリアオガエル(下が雌、上の二匹が雄)



モリアオガエルの卵塊

モリアオガエル

水辺に張り出した樹の枝に泡状の卵塊を産み付ける習性があることで有名である。

福島県平伏沼(へぶすぬま)の繁殖地、また岩手県八幡平市の大揚沼モリアオガエルおよびその繁殖地が国指定の天然記念物になっている他、地方自治体でも指定している場合がある。「森の広場」では毎年6月中旬頃に数十個の卵塊が観察されている。近似種に「シュレーゲルアオガエル」がいるが「シュレーゲルアオガエル」は水田地帯に棲息して水際の植物の根際などに同様の泡状卵塊を産み付ける習性がある。両種は非常に類似しているので区別は難しい。

「新緑の森林浴」と「初夏の動植物観察」



オオヤマザクラが咲く観察路

晩春から初夏にかけて、生き物たちが活発に活動し出します。落葉樹は葉を開き、いろいろな植物が花を咲かせます。また、花の蜜を目当てに昆虫類もさかんな行動を行います。

生命の息吹を感じつつ、「森の広場」の森林浴と生きもの観察を楽しみましょう。

カエルのなかま

ニホンアマガエル (アマガエル科)

最も普通に見られるカエルで、雨の降りそうな時に一斉に鳴く習性がある。体色は周囲の色調に合わせて色々変化する。草むらにいる場合はほとんど緑一色であるが、鼻孔から目の後方(鼓膜後方)にかけて黒斑があるので「アオガエル」属とは容易に区別できる。繁殖期は「ヤマアカガエル」や「アズマヒキガエル」に比べればやや遅く晩春～初夏の頃である。



アズマヒキガエル (ヒキガエル科)

繁殖期になると池など特定の場所に多数集まって産卵する習性がある。雄は滑らかな肌になり黄色や農褐色に変身する。変身した雄は雌を見つけると雌の背に乗りガッチリと雌を抱きかかえたまま産卵場所へ誘導して産卵させる。雌を見つけられなかったアブレ雄は雌を奪い取ろうと争奪戦が展開される。この様子を「ガマ合戦」と表現している。(右下は卵塊)



ヤマアカガエル (アカガエル科)

早春最も早く産卵を開始する。池の周辺に1mほどの残雪が残っていても産卵が見られることから越冬は水中の泥の中と思われる。産卵は池の特定場所に集中して行われ、産卵時期の異なる卵塊が複数混在している場合が観察される。産卵からオタマジャクシになるまで室温(15～20℃)で約10日間かかる。



ツチガエル (アカガエル科)

平地の沼に棲む普通のカエル。生息域は水際が多く、林内に入ることはほとんどない。繁殖期は「モリアオガエル」とともに遅い方で6月以降である。卵の大きさは日本産の蛙中最も小さく黄褐色の1.5mmくらいの卵を水草の間に産み付けている。オタマジャクシの成長は緩慢で、早春、発見されるオタマジャクシはほとんど「ツチガエル」のオタマジャクシである。



池や水辺に済む動物



ニホンザリガニ (アメリカザリガニ科)

青森・秋田・岩手と北海道西部にのみ生息する日本固有種。絶滅危惧II類に指定されている。青森市内でも、かつては各地で見られたが年々数が減少している。「森の広場」では、2007年に生息が確認された。



カワニナ (カワニナ科)

「ゲンジボタル」の幼虫の餌になることで知られている。「カワニナ」がたくさん棲んでいる場所では「ゲンジボタル」も期待できそうである。「ゲンジボタル」を復活させる運動が各地で盛んであるが、まず、「カワニナ」の棲める環境づくりが大切である。「森の広場」でもたくさんみられ、「ゲンジボタル」の生息が期待されていたところ、2007年に確認された。



オオミズスマシ (ミズスマシ科)

この「オオミズスマシ」は「ミズスマシ」より一回り大きく、翅の末端に突起がある。「ミズスマシ類」の眼は特殊な四つ目構造で、水面上の餌と水中の餌を見分けられる構造になっている。くるくる回る動きの速い行動は天敵からの攻撃を防御するための行動と考えられている。



ミズムシ (ミズムシ科)

水中に住む半翅目の昆虫で、オール状に横に張り出した脚ですばやく泳ぎ回る。体に空気をためる仕掛けがあり、何かに掴まっていなと浮き上がってしまう。水の入ったコップの底に紙片とこの虫を入れると紙と一緒に浮きあがり、浮かばあわてて紙片を放して潜る様子が面白いので「風船虫」と呼ばれて親しまれていた。

トンボのなかま

クロスジギンヤンマ (ヤンマ科)

早春から出現するトンボで5月中旬には画像のように産卵を始めている個体も見られるかも知れない。調整池の北岸では水際のヤナギなどの枝に多数の羽化殻(羽化は深夜)が見られた。成虫の胸部は美しい黄緑で黒い力強い黒条が2本ある。「ギンヤンマ」は広く開放された水域を好むのに対し、「クロスジギンヤンマ」はやや狭い水域でも繁殖する。



ヨツボシトンボ (トンボ科)

早春の湿地を代表する「トンボ」の1種で体がガッチリしたトンボ。4枚の翅の中央部に黒い斑紋があるので「四つ星トンボ」と呼ばれている。春にだけ水辺に現れるのであまり人目に付かないまま出現期が終わっているのかも知れない。各地の湿原には普通のトンボである。黄色の地に黒班のある毛深いトンボで、大きさは中型で飛翔スピードは速い。



コサナエ (サナエトンボ科)

田植えの頃に出現する春のトンボという意味で「早苗トンボ」と言うグループに分けられている。「森の広場」の調整池で多数発生して遊歩道のフキの葉に止まっているのが観察できる。「早苗トンボ」の仲間は羽化する時、ほとんど平らな所でも可能である。水際で羽化中の個体が見られるかも知れない。



エゾイトトンボ (アオイトトンボ科)

体色はブルーのイトトンボで、6月頃から水辺で観察される。同じようにブルー系のイトトンボ類には「オゼイトトンボ」「ルリイトトンボ」がいるが、「オゼイトトンボ」は「エゾイトトンボ」と同じ環境に棲むので紛らわしい。腹部第2節背面の黒班の形で区別できる。斑紋がトランプの「スペードマーク」であれば、「エゾイトトンボ」である。



シジミチョウのなかま



ベニシジミ (シジミチョウ科)

最も普通のシジミチョウ。日当たりの良い場所が好きで、住宅地の小さな空き地から野山まで明るい場所なら何処にでも現れる。気温の高い夏には黒っぽい色調になるが、気温の低い春型の個体は朱色が鮮やかで美しい。食草は、スイバやギギシなどで雑草を食べてくれる。生活力旺盛でたくましいチョウです。



ツバメシジミ (シジミチョウ科)

後翅の先にツバメの尾のような小さな突起がる。♂の翅の表面は青紫色で縁が黒くなる。♀は黒色に近く尾の付近に橙色の紋がある。裏は白地に黒色と橙色の紋がある。草春から秋まで続けて現れるが、春と秋に多くなる。幼虫の食草はマメ科植物各種のつぼみや花。



トラフシジミ (シジミチョウ科)

里山に早春から現れる。とくに春の個体は縞模様が鮮やかで、「虎斑シジミ」と命名されている。夏の個体は白い縞模様が褐色になって目立たなくなる。幼虫はマメ科植物の他、色々な植物の花や軟らかい葉を食べて育つ。成虫はいろいろな花で吸密しながらやや速いスピードで飛翔する。しかし、飛翔距離は短くすぐ止まる習性がある。



ルリシジミ (シジミチョウ科)

春早くから出現する瑠璃色の小さなチョウで各地に普通。幼虫はマメ科の花やつぼみを食べる。ほとんど1年中見られる身近なチョウである。

植 物（青・黄色の花）

キラソウ（シソ科）

本州や九州に分布し、路傍や林縁に生育する多年草。濃紫色の花は小さいが、目につきやすい。茎は地を這う。ジゴクノカマノフタという別名を持つ。茎葉を揉みつぶして塗ると、虫さされに効くとされている。



コバノカキドオシ（シソ科）

ヨーロッパ原産の帰化植物。森の広場では、限定的な場所に生育している。開花後、蔓がどんどん伸びて垣根を越えていく様から「垣通し」の名が付けられた。道端などで見かける日本原産の「カキドオシ」は、茎葉を乾燥させたものを「連銭草」と称して疝(かん)の薬・強壯薬に使われる。



ヤマブキ（バラ科）

小判を形容する「山吹色」という色名からも分かる通り、日本で古くから親しまれてきた落葉低木。日本全土に分布する。太田道灌の故事に出てくる「山吹」は八重咲きのもので実をつけないが、一重のものは結実する。



ニワトコ（スイカズラ科）

本州・四国・九州に分布する落葉低木。かつては、枝の柔らかい髓がプレパラート作成時に利用された。実は果実酒に利用できる。日本名の接骨木(せつこつぼく)は、昔骨折の治療時に使用された事による。



植 物 (黄色の花)



ウマノアシガタ (キンボウゲ科)

日当たりがよい山野に生える多年草。花は1.5~2cmで、草丈は30~60cmほど。花卉に光沢があるので、遠くからでも目立つ。葉身の形を馬蹄に見立てて名前が付けられた。八重咲きの品種がキンボウゲ(金鳳花)と言われている。



エニシダ (マメ科)

地中海原産の落葉低木。5~6月頃黄色い花を咲かせる。観賞用や花材として植栽され、乾燥に強いことから荒地への治山植栽へも利用される事が有った。森の広場では、多目的広場東側の観察路沿いに植栽されている。



トチノキ (科)

北海道から九州に分布する落葉高木。「マロニエ」は近縁種。巨木になるため、家具の木材や白の材料などとして利用される。灰汁抜きした実は、食料としても重用され、栃餅などが作られている。また、アルコール漬けて湿布剤にも利用される。



エゾタンポポ (キク科)

日本原産のタンポポ。北海道から本州中部まで分布する。帰化植物のセイヨウタンポポに押されて数が減少している。総苞外片は下方に反り返らない事で、セイヨウタンポポと区別できる。根を煎ってコーヒーの様に飲用できる。

植 物（白色の花）

オオカメノキ（スイカズラ科）

樹高数m程になる小高木。名前の由来は、その葉の形を亀の甲羅に見立てたことによる。別名、「ムシカリ」。よく目立つ花序周辺の大きな花は、装飾花と呼ばれ、雌しべや雄しべが退化して実をつけない。中央部の目立たない小さな花が正常花で稔性がある。森の広場では、西側の観察路で見る事が出来る。



ガマズミ（スイカズラ科）

日本全国に分布する落葉低木。樹高は3~5m。5月頃に白い花を咲かせる。秋につく赤い実は、よく目立ち、果実酒などに利用される。青森県三戸地方ではガマズミの実を「ジョミ」や「ゾミ」などと呼び、マタギの疲労回復に使われたという。現在も地域おこし商品としてガマズミジュースなどが作られている。



ヒトリシズカ（センリョウ科）

日本各地に分布する多年草。低山の林内や林縁に生える。ブラシの様な白い部分は、雄しべの集まりで、花弁や額は無い。花が咲く姿を静御前が舞う姿にたとえて名付けられた。近縁種に花穂を2本以上出す「フタリシズカ」がある。



ヤマボウシ（ミズキ科）

分布は本州以南で湿潤な林地に生育する落葉樹。初夏の頃、枝の上を一面に覆う様に見える白い総苞は見事である。実際の花は4枚の白い総苞の中に多数の小花を咲かせる。秋には実が赤く熟し、食べられる。和名は、その姿を白い頭巾を被った「山法師」に見立てられたことに由来する。



植 物 (紅・緑色の花)



オオヤマオダマキ (キンポウゲ科)

草丈数十cmになる多年草。山地の明るい林内に生える。花の形が独特なので、区別はつきやすい。距(花の後部の突き出た部分。スマレなどにも見られる。)が内側に強く巻き込まないヤマオダマキは、森の広場では見られないようだ。



タニウツギ (スイカズラ科)

初夏を彩る日本固有の落葉低木。主に日本海側に生育する。淡紅色の花の群生は遠くからも目立ち、青森市内の各地道路斜面でもよく目にする。開花期が田植え時期と重なるので、地域によっては「田植え花」などと呼ばれている。別名「ベニウツギ」。



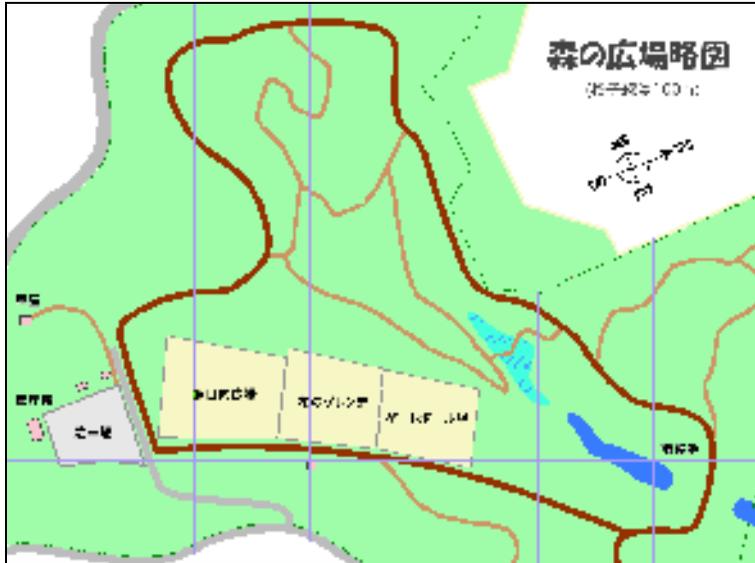
エゾツリバナ (ニシキギ科)

秋には、赤い花びらのように見える仮種皮(5裂する)から実が垂れ下がり、目立ちやすい落葉低木。初夏の頃に咲く黄緑系の花は、一転して目立たない。森の広場では、西側の観察路沿いに植栽されている。



タチシオデ (ユリ科)

日本各地の山野に生える蔓性の多年草。雌雄異株。初夏に黄緑色の小さい花を散形につける。よく似たシオデも森の広場に生育するが、「花被片が反り返ること」と「花期が夏」であることで、区別できるだろう。若芽は食用になり、「ヤマアスパラ」などと言われている。



■ 野外観察にあたってのご留意事項

■ 野外における危険性について

- ✓ 「森の広場」には、皮膚かぶれをおこす「ウルシ」などの植物や刺されるとショック状態を引き起こす「スズメバチ」などが生息しています。危険性を認知して行動して下さい。
- ✓ 「森の広場」の観察路は非常に良く整備されていますが、急勾配の部分も有ります。濡れた路面や水辺などで足を滑らせて怪我をしないよう、慎重な行動をとりましょう。
- ✓ 自然の中では、大なり小なりの危険性が伴いますので、ご自覚の上行動には充分ご注意ください。

■ 野生生物の保護について

- ✓ 鳥や小動物などを驚かせないように静かに行動しましょう。
- ✓ 足で踏みつける事によって弱っていく植物が有ります。足下にも気を配り、観察路からはずれる事は最小限にしましょう。
- ✓ 生物の採集は、より良く観察するための手段の一つです。ただ、多くの人が採集などを行うと自然のバランスが崩れてしまいます。採集や切り取りなどは可能な限り控えて下さい。
- ✓ 「森の広場」は、そこに生息する生物たちの生活の場です。将来にわたって生き物たちが暮らせるよう、「彼らの世界に、私達がお邪魔している」という気配りで接しましょう。